

コメントライナー

第6286号

2017年9月12日(火)

◎北朝鮮ミサイル 日韓の温度差

防災・危機管理アドバイザー 山村 武彦

◆意外に緊張感ないソウルの訓練

人口990万人を抱え、北朝鮮との軍事境界線から約40kmの首都ソウル。ミサイルでなくとも砲弾が届く距離である。朝鮮戦争の休戦後、ソウルには地下街、地下道が多くつくられ、市内だけでも3,924カ所の地下シェルターがあり、壁には懐中電灯や防毒マスクも設置されている。

2017年8月23日午後3時、ソウル市の民間の戦時訓練(通称:民防衛=ミンバンウィ)が始まった。日本の国民保護サイレンに似た重苦しいサイレン音が鳴り響く。交差点には多数の警察官が配置され、信号が赤の点滅に変わり、車両は一斉に停車した。シェルター入り口には市職員が待機している。しかし、表通りの人影は少なくなったが、それでも歩いている人もいて緊張感が感じられない。それに一步裏道に入ると車は動いているし、買い物を続ける人たちも多い。それが咎められることもないようだ。ソウル市職員によると、20年ほど前までは民防衛訓練を毎月やっていたが、最近では徐々に減り今では年に1回となり、時間も短縮されているとのこと。何ともゆるい訓練に拍子抜けした。

◆「北は当分仕掛けてこない」

元京畿道職員のB氏は「北は当分仕掛けてこないとみんな思っている。中国とロシアが米国と本気で戦おうとしない限り、北が単独で仕掛けてくることはない」と見切っているから訓練にも身が入らない」という。

B氏によれば、朝鮮戦争時、破竹の勢いで韓国に攻め込み、韓米連合軍を苦しめた北朝鮮軍は、韓国全土を制圧するまで引くつもりはなかった。しかし、米軍司令官のマッカーサーに「これ以上やるなら北に原爆を落とす」と脅され、しぶしぶ休戦に応じたとされている。「あのとき自国に核があれば、米国の脅しに屈せずに済んだのに」。金一族は悔しさを骨に刻んだ。金正恩も「核を保有するしか生き残る道はない」と思い込んでいる。彼らは全てを犠牲にしてでも核開発を続けるだろう。だから核の凍結・放棄を前提として北が真剣に交渉のテーブルに着くわけがない。そして、「核戦力が配備されるまで北は仕掛けてこない」が韓国での共通の認識という。

半世紀前、民族同士血みどろで戦い親兄弟を失い、分断された家族も多数いる。兵役後も8年間の予備役と40歳までの民間防衛義務がある国だからこそその達観である。日韓の有事意識や温度差を軽々に論じることはできないと肝に銘じた。

◆Jアラートが鳴ったら

最近「Jアラートが鳴ったら？」という質問が多い。発射情報から着弾までの猶予は3~5分だが、短時間だからこそ訓練が欠かせない。頑丈な建物や地下に避難する理由は、着弾時の熱・爆風、飛散破片に備えるためである。パニックにならず安全行動ができればミサイルの直撃確率は低く、極度に恐れる必要はない。湾岸戦争時、イラクからのミサイルがイスラエルに38発着弾したが死者は2名だけだった。
(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003